

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24780224

研究課題名(和文) 女性農業者のワークライフバランスとキャリア形成に関する実証研究—日欧韓国際比較

研究課題名(英文) Empirical Analysis of Work Life Balance and Career Formation of Female Farmers
-From a comparative analysis in Japan, Europe and Korea-

研究代表者

堤 美智 (TSUTSUMI, Michi)

日本大学・生物資源科学部・助教

研究者番号：60609569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：女性農業者がワークライフバランス(WLB)をどのように考え、実践しているか、その実態を生活時間分析から調査し、国際比較の視点を加味し、今後の支援体制を検討した。その結果、女性農業者のWLBの実態は国内においても、また、国際比較の観点からも農業経営、作物、労働、農業・社会保障制度など多様な背景と要因があることが明らかになった。これらを背景に、日本において行政が行っている女性農業者のキャリア形成支援のための研修に着目し、経済的自立、キャリアアップの効果とその評価を検討した。

研究成果の概要(英文)：I investigated how did female farmers consider their work life balance (WLB) and how it was being practiced, and analyzed the actual condition from their living time. We also included international comparison and considered the support system in the future.

It became clear that there were various backgrounds and factors in viewing the reality of a female farmer's WLB, i.e. farm management, crops, labor and agricultural social security system, both in Japan and international comparison.

I observed training programs for career support of female farmers by the government, and investigated the effects of such training programs in terms of economic independence and career improvement, as well of their evaluation.

研究分野：農学

キーワード：ワークライフバランス キャリア形成 女性農業者 国際比較 生活時間

1. 研究開始当時の背景

(1)本研究は、女性農業者を対象に生涯にわたり健康で農業労働と家庭生活、休暇、余暇、社会活動、地域貢献をバランスよく実現するにはどのような諸条件、支援が必要かを模索する研究調査を行ってきた背景がある。

(2)社会政策の領域においては、男女共同参画推進などとの関連で、勤労女性を対象にワークライフバランス(以後 WLB と省略する)を進める政策が注目、推進の機運がある。ところが、女性農業者に関しては勤労者とは労働の形態や労働時間のあり方が相違することから、その必要性などが十分語られることがない状況にあり、その検討の必要性から実態を把握して研究を進めてきた経緯があった。

(3)女性農業者と勤労者の労働時間の配分や家庭生活、地域活動、余暇などにおいて異なる実態があり、それに伴う様々な課題があるが、その支援体制、環境を整える諸条件が未整備な背景があった。

(4)働く意思をもつ女性農業者が出産、育児期において、一定期間休みが取れ、働きたいときに働ける、農業と育児、休暇、社会貢献など理想的なバランスが実現できるための支援、施策を検討することを企図して調査研究を計画し、実施してきた背景がある。

さらに、新規に農業に従事しようとする女性たちも含め、女性農業者の職業キャリア形成、農業者としてのキャリア形成の諸条件を検討したいと意図していた。

日本における女性農業者の WLB を基に、先進国とみられる海外にフィールドを広げ、WLB がどのように実現されているか、その意識と実態、諸条件を調査、女性農業者の職業形成過程の解明をしたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、女性農業者が生涯にわたり、健康で仕事と生活・余暇をバランスよく実現するための支援体制を検討し、円滑なキャリア形成諸条件を解明することである。ここではまず、女性農業者の WLB について、生活時間調査から実態を明らかにする。その中で、ライフコースの視点からキャリア形成のプロセスを解明し、課題に迫る。すでに日本を中心にデンマーク、フランス、

オランダの調査を行ってきたが、ここでは対象をドイツ、イギリス、韓国における女性農業者に広げ、国際比較の点からテーマに迫る。行政で行っている女性農業者へのキャリアアップ事業、経済的自立を促進する起業化への研修を通して、如何に女性たちがパワーをつけていくかを調査し、その効果を分析する。WLB の在り方と学びへの取り組みの実態を把握するとともに、海外との比較を通じて日本の農業・文化、暮らしに適応した女性農業者への支援のあり方、キャリア形成諸条件を見出したい。

3. 研究の方法

構造化面接調査、インタビュー、参与観察、資料分析の方法で行った。

(1)調査票を用いた構造化面接調査:調査票を作成し、日欧において同じ内容で行った。日本で行った内容と同じ調査票を英語、ドイツ語、フランス語に翻訳をして面接調査を実施した。女性農業者の WLB の実態把握が主であるが、その背景となる労働形態、経営参画、作物、家族形態などを調査項目に入れ、出産・子育て期の働き方・休み方・余暇の過ごし方の現状を把握した。具体的には生活時間を中心に、農閑期と農繁期別、平日(月曜日～金曜日のいずれか1日)と日曜日・祝日のそれぞれ1日の生活時間について調査した。どのような時間配分で仕事と子育ての両立や、ニーズに応じた意思決定ができていくかを個人面接によって行った。

(2)インタビュー:日本においては、行政が行った講座、研修に参加した女性たちに「パワーアップ効果と実践・意識の実態調査」(139 事例)を行った。その中から、インテンシブなインタビュー調査を行い、WLB の在り方と学びへの取り組みの実態を把握した。

ヨーロッパ農村調査においては、女性農業者への面接調査の前後に、行政担当者や農業の専門家にフィールドの概略や特徴、個別農家、地域の諸特性をインタビューした。

(3)参与観察調査においては、いずれも調査対象者でもあるアグリツーリズムに滞在し、ワークライフバランス(WLB)の聞き取り調査と合わせ、農場視察や体験を行った。

(4)資料分析:すでに筆者が行った調査票の分析と既存文献資料、行政資料の分析を行った。生活

時間調査はNHK放送文化研究所による「国民生活時間調査報告書」を参考に分析をした。また、韓国に関しては、2013年に韓国農村経済研究院から出されている「女性農業者実態調査」資料を分析参考にした。

4. 研究成果

(1) 女性農業者のWLBの実態と知見・課題

日本におけるWLBは、男女共同参画推進のための方策として、男女均等政策の重要な政策として提案されてきた。また最近では出生率向上を目指した少子化対策のための方策として、勤労者の生活改善、労働時間削減、労働環境などを改善するための政策として語られることが多い。出生率向上のために、男性の育児参画を促すことにもWLBが注目されるようになってきた。このような動向は日本のみならず、先進国においてみられ、政策の重要な推進課題となってきた。

ところが、農業人口は減少していると言え、農業人口に占める女性と高齢者の割合は依然多くある中で、女性農業者に対するWLBへの注目は必ずしも高いとは言えない。むしろ、地域を支え、リードをしている中心は女性農業者であることが多く、WLB対策は重要である。ここでは、女性農業者がそれぞれのライフステージで働きたいときに働き、休みたい時に休めるようなWLBを整えるにはどのような課題があるか、これらを実現することによって農業生産性の向上、地域活動、地域の活性化に貢献していくのではないかとの問題意識があった。

かつては都市勤労女性よりも女性農業者の方が出生率は高いなど、都市と農村では夫婦が持つ子どもの数も異なると言われていた。今日は、農村地域の都市化現象がすっかり浸透し、その様な地域別特性に大きく左右されない状況で少子化傾向がある。

ここで、生活時間分析から仕事と子育て、生活の時間配分を分析した結果、勤労者と農業者、夫と妻を比較すると夫は勤労者よりも農業者の方が4倍近く育児時間をもっている。しかし、家事時間はどちらの男性も少ないが、妻は平日、日曜にかかわらず、女性農業者の従事時間数は多い。仕事時間は農業者の場合、農閑期と農繁期で大きな差があるが勤労者は平日と休日に差がある。これは労働形態による違いである。自由時間は勤労者

の方が農業者の男女問わず多い。勤労者と農業者などの労働形態によってWLBの対応が課題となることは明らかである。

農業者の場合、今日でも多くは家族経営であるが、家族経営協定の推進、経営の合理化などにより、自分の意思に基づいて労働に従事するようになってきたため、農繁期のような拘束時間はあるが、比較的裁量労働である。子育て期には子どもにかかわる時間を多く取り、子どもが育児期を脱したところで仕事に時間を多く配分するパターンをとっていることが確認された。詳細な分析結果は割愛するが、女性農業者へのWLB政策は重要であるにもかかわらず、その実態に合わせた支援対策が取られていないことに目を向ける必要があることをあらためて提案したい。

(2) 女性農業者のWLBに関する調査-国際比較の視点から-

テーマに関する海外研究調査の企画、実施してきた。この間の成果は、日本と異なる農業政策・社会制度や生活意識を持つ諸外国における実態を把握し、今後行う国際比較研究の基礎データを収集することが主な目的である。まず、各国の農業政策、制度を理解し、農業地域の概況、特徴を明らかにする。すでに、オランダ、デンマーク、フランスは地域を限定して農業の概況、女性農業者を取り巻く生活と労働環境の部分的、基礎的な調査を実施してきた。日本と同一の基本的な英文とフランス語の調査票を作成し、予備調査をしている。今回は、平成24年夏に、ポルトガル・リスボンで開催された世界農村社会学会大会で、「日本女性農業者の経済的自立支援とキャリア形成」について報告をした。2012年から2014年の科学研究助成期間ではドイツ、イギリスの実態調査を実施し、その他に関しては補足調査を行った。韓国に関しては資料分析を行った。

女性農業者を対象にWLBに関して面接調査を行った対象者数は、すでに行ったものを含めて、デンマーク(2ケース)、オランダ(8ケース)、フランス(8ケース)、ドイツ(11ケース)、イギリス(1ケース)である。これらは2010年から2014年(科学研究費助成期間2012,13,14年)に行った。ここでは、科学研究助成期間で行ったドイツ、イギリスの面接調査を中心に記述し、韓国は資料分析の成果を記述する。結果の概略を以下

に述べ、今後の基礎資料とする。

ドイツ(11 ケース): 調査した地域は、バーデン=ヴュルテンベルク州で、ドイツ南部、フランス、スイスの国境が交わる周辺の農村地帯である。シュヴァルトツヴァルト(黒い森)とフランスボーゲン山脈の間にある広々としたライン平原の丘陵地帯であった。近くに、バードクロティンゲンと言う温泉を利用したクアと健康、リラックスができる日本でいえば温泉の町に近い、いやしの里とも言える町があった。かつて、シュヴァルトツヴァルトの森が枯れる環境問題もあったこともあり、地域の住民は農業を営むことによる土地の保全、森林の保護への意識は高く、面接調査をした農家のすべてが自然を大切にしながら暮らしていた。山間地に近い農家では冬の暖房は各家庭で自分の山から薪を切り出し調達し、農業と共に自給的な暮らしを誇らしげに見せてくれた。

面接した農家の家族形態は夫婦家族がほとんどであったが、親子で農業経営をしている場合、親と子世代で同一敷地別棟に住んでいる事例があり、三世代、四世代がいつも顔を合わせることが出来る距離にいた。食事と一緒に取ることが多いという。近隣関係、親戚との付き合いも親密で、面接中に子どもが入ってきて、冷蔵庫を開けて何か食べ物を探しているから対象者の子どもかと思ったところ、いつも可愛がっている近所の子どもであるとの説明を受けた。

対象者の作目は多様であったが、アスパラの特産地であり、その他にジャガイモ、ワイン用ぶどう、かぼちゃ、トウモロコシ、山地の方ではクリスマス用のモミの木、牧畜を行い、自家製のチーズ、ソーセージをつくっている。農産物を生かしたレストラン、宿泊などを営み、年間を通して農繁期であるという事例が多くあったが、夏にカフェを締め夏休みをとる。子ども世代は夏休み、親世代は冬休みをとるなど、相互に調整し合っている。年間何回かとることがある。今の若い人は必ず休暇を取るように行政も進めているという。その意味で、WLB は若い世代ほどとれていて、子育てもみんなで協力(公的支援もっ含めて)しあっているという。年代によって、WLB の取り組みは異なり、若い世代ほど、その認識度は高く、生活を楽しみたいという傾向があった。当然、作目による農繁期の時期の違いはあるが、休暇を取

るという認識はかなり浸透しているようである。

当地の人は交通が便利と言うが、我々には便利とは思わないほど移動するには車がないと不便なところであった。ハーブガーデンをしたく都会から引っ越してきた農業者もいた。女性農業者のキャリア形成という点からみると若いころはサービス業、「食」にかかわる仕事をしてきたが、さらに農業はキャリアを総合的に活かせる職業であると考え、キャリアアップと位置付け転職をして農業に従事している事例もあった。農業はビジネス、生活の手段、それを活かした生活を楽しみ、休暇は必ず取得するという考えは、30 - 40 年前の親、祖父母世代にはなく、最近の傾向のようである。かなり、WLB に関して、行政的な支援や教育も効果をもたらしているかと思われたが、まだ、詳細な聞き取りで確認するまでには至っていない。

イギリス(1 ケース): イギリスでは、ノースヨークシャー州のイージングウォルド周辺の農家調査を行った。ここでは、今まで行ってきたフランス、ドイツ、デンマーク、オランダなどの資料、結果とどのように異なるか、また、類似しているかを探る予備的な資料収集を目的とした。科学技術の先進国であるイギリスは先進的な部分と伝統的なところを重んじる価値観があるといわれている。「伝統と近代がどのように同居しているか」を農業者家族において参与観察的に行うことにした。伝統的な羊毛工業の発達した地域に限定し、畜産農家の経営する農家民宿(アグリツーリズム)を選定し、参与観察的に実態を調査、面接調査も行った。

他の地域で実施した半構造化した調査票(英語)を用いインタビューを行った。日本でいう第六次産業は早くから行われている。WLB に関する聞き取り調査から身体と精神のバランスのとり方、工夫、仕事との兼ね合いなども配慮していた。インタビューを行った女性(50 代)の日常生活は、夫が経営する畜産をサポートし、自身はアグリツーリズムの経営をしていた。仕事と家庭生活が一体となっているがバランスに関する配慮を特にしているわけではなかった。

韓国(資料分析)

韓国において、女性農業者の WLB に関して、どのような実態があるか、その支援体制、農業者としてのキャリア形成にはどのような諸条件があ

るかを限られた資料からではあるが検討した。得られた知見は以下のである。

農業従事に至った理由については、夫が農業者であり、結婚と同時に農業を始めた比率は全体で79.8%、年齢が高いほどその比率は高い。その地位は、「専門的な女性農業者」と認識する比率は(38.6%)「経営主」(41.4%)であり、年齢が高いほど「経営主」と認識している。活動分野別の関与度は多少相違があるが、夫と半々で担当する比率が高く、生産活動には40%以上関与している。販売活動は年齢が低いほど、営農規模が大きいほど参加率が高い。所得への関与は年齢が高いほど大きい。

地位に関する認識は、男性よりも低いとの意見が83%以上あり、若い年齢ほど差別意識がある。「仕事をしても家事は女性担当」という意識が70%以上あり、伝統的な性別分業はまだ根強い。その背景にはWLBを取りたいと言う認識がどの程度あるかはこの限りではわからない。女性が社会活動や団体活動に参加する状況は50歳代が最も高く、月平均2.09回、次いで40歳代1.81回、60歳代1.52回で、30歳以下では1.23回と低い。

今後の課題として挙げられているのは、「多い順に過重な労働軽減」「福祉施設と制度の拡大」「経済社会的地位の向上」「保育・教育の施設拡充」「技術・資金支援」「専門経営教育」などが挙げられている。WLB政策推進のための支援という意識はなく、女性農業者支援の制度の認知普及の重要性が指摘されている。そこで、教育、文化、世話の機能を共有する目的で2011年に始まった女性農業者センターの認知と需要、農村活動の維持、農村人口減少対策のためにも生活向上が必要であると指摘している。当面の課題として「女性が住みたい農村環境は過重な労働から抜け出して良い教育環境で子どもを教育して農業所得で期待する生活水準を維持して文化生活を楽しむこと」とし女性支援の重要性を指摘している。この点から言えば、次に述べる取り組みは重要になる。

(3) キャリア形成に向けての取り組みと諸条件 経済的自立支援

WLBへの対策には多様性の観点が必要である。それぞれに生活の様式が違うように、人生のステージによりその求める内容も多様であることが指摘できた。女性農業者のWLBの共通する点とし

ては、農業者として多くは人の命をつなぐ「食」の生産、安全安心が求められる生産従事者であること、商品は自然環境に大きく左右されることなどがある。生産する作目の種類によって、農業生産の環境によって多様性を持ち、その実現のための背景と条件があることが明らかになった。農業が家業ではなく、自らが描く職業としての農業を行政が支援する研修や講座をどのように受け止め、キャリア形成していくかをWLBの視点から探った。資料は講座を受けた時のレポート、対象者への聞き取り調査、活動状況の実態調査などから資料分析した。これを世界農村社会学会で事例を中心に報告(英語)した概要・結果は以下である。

キャリア形成に向けての取り組みの動機は、WLBの視点からみると仕事の充実「新しく農業に関して何かしてみたい」、直売、ネット販売など「もっと利益の出る方法を学びたい」「自分たちで独立し起業したい」「自分の能力や技術を生かしたい」「年齢に関係なく、健康なうち働きたい」「仲間と情報交換をしたい」などがあげられた。研修、講座の効果としては、受講することによって仲間ができ、同じ夢を持っている女性たちと情報交換することができた。自分が目指している起業例を実際に見たことで「自分もできそう」と言う自身をもった。NPOを立ち上げ、ネット販売などの新たな販売方法を学び、経済的に役立った。従来の生産を主とした農業から流通、販売まで生産販売管理をする仕組みがとれるようになり、自分で栽培したものをレストランに出すなど、「第6次産業化」の方向をとり、経済的自立をした事例があった。作物別には、果樹栽培は加工品づくり、ネット販売に関心があったが、レストラン経営を行う事例も見られた。野菜栽培は有機栽培や自然農法に関心があり、その実践を通して経済力を身につけ、WLBを実現したいとの期待があった。また、WLBの視点からみると年代別にバランスのとおり方が異なる。子育て期にはほとんど農業労働には関わらない事例が多く、子供にかかわっている。農業は子育てがある程度一段落してから従事したいとの意向を示す例が多くあった。かつてのような農家の嫁は労働力と言うイメージは全くと言ってよいほど見られなかった。

ここで、女性農業者のキャリア形成に関して行政の支援は重要な条件であることが確認されたと

同時に女性たちの情報交換、ネットワークづくりは女性たちが経済的に自立していくための諸条件になることが示唆できた。女性農業者たちが実現したいキャリアに沿ってそれぞれの年齢ステージ、作物別など多様な支援が必要であることは言うまでもない。勤務労働から転職をした女性の中には自分の生活時間を自分で決めることができる点を指摘していた。勤務よりも農業の方が子育てしやすいという事例もある。それが必ずしも勤務から農業への転職の理由ではなく、結婚による転職であることが多い。転入者である女性農業者たちの活動はその地域の活性化にも寄与していることがある。アジア農村社会学会においては、講座のレポート分析を通して、起業を目指す女性たちがどのようなプロセスでキャリア形成し経済的自立をしていったか、WLB の実態に注目し分析した。その結果において、公的支援の効果と重要性が確認された。

<参考・引用文献>

原ひろみ・佐藤博樹 2008「労働時間の現実と希望のギャップからみたワーク・ライフ・コンフリクト ワーク・ライフ・バランスを実現するために」『季刊家計経済研究』夏号 ,pp.72-79
権丈英子, シブ・グスタフソン, セシール・ウェッツェルス 2003「オランダ, スウェーデン, イギリス, ドイツにおける典型労働と非典型労働」大沢真知子, スーザン・ハウスマン編『働き方の未来 非典型労働の日米欧比較』日本労働研究機構, pp.222-262.

権丈英子 2006b「パートタイム社会オランダ: 賃金格差と既婚男女の就業選択」『社会政策学会誌』第16号, pp.104-118.

権丈英子 2009a「長時間労働とワーク・ライフ・バランスの実態 連合総研「勤労者短観」から」連合総合生活開発研究所『広がるワーク・ライフ・バランス 働きがいのある職場を実現するために』pp.141-163.

中安定子 1992「人間の労働をどう評価するか」農村女性問題研究会編『むらを動かす女性たち』p.42 家の光協会, (社) 農山漁村女性・生活活動支援協会

大島綾子 1992「海外における女性農業者の立場」農村情勢問題研究会編『むらを動かす女性たち』pp.203-228, 家の光協会, (社) 農山漁村

女性・生活活動支援協会

堤 美智 2009「女性農業者のワーク・ライフ・バランスに関する実証分析」『2009年度日本農業経済学会論文集』pp.362-369

独立法人 労働政策研究所・研修機構 2012「データブック国際労働比較 2012年版」富士プリント株式会社

5. 主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計3件)

堤 美智 *Empowerment of Female Farmers Wanting to Start a Business, Asian Rural Sociology Association 5th* 2014年 p.268-277 査読有

堤 美智 オランダ女性農業者の働き方からみた生活時間分析 山梨県立大学国際政策学部紀要 2013年 p.57-64 査読有

堤 美智 *Financial Independence Support and Career Formulation of Japanese Female Farmers, XIII World Congress of Rural Sociology, Portuguese Lisbon* 2012年 査読有 (IRSAHPにて2012年~2013年の期間掲載)

〔学会発表〕(計3件)

堤 美智 *Empowerment of Female Farmers Wanting to Start a Business, Asian Rural Sociology Association 5th* 2014年9月2-5日 Vientiane City ラオス

堤 美智 オランダ女性農業者の働き方からみた生活時間分析 日本農業経済学会 2013年3月30日九州大学伊都キャンパス 福岡県

堤 美智 *Financial Independence Support and Career Formulation of Japanese Female Farmers, XIII World Congress of Rural Sociology, 2012年8月2日リスボン, ポルトガル*

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堤 美智 (TSUTSUMI, Michi)

日本大学・生物資源科学部・助教

研究者番号: 60609569